

VetScan® products by
ABAXIS

*Vet***Com**

Jan/Feb 2012

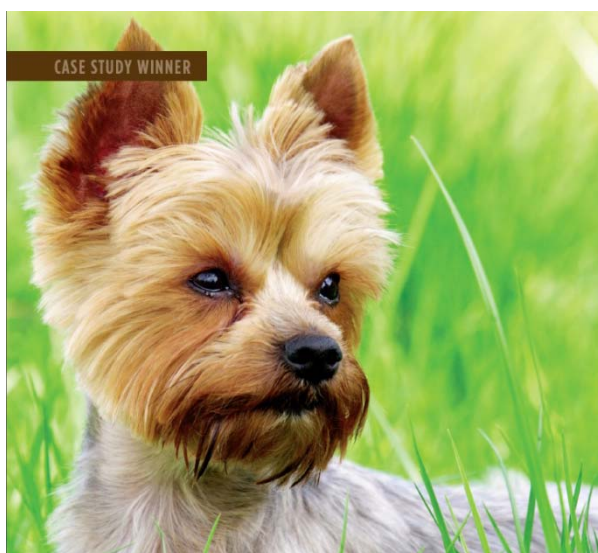


 株式会社 **セントラル** 科学貿易

ケーススタディ第1位

誤食行動からアジソン病に

寄稿：ロバート・ロフスキー (Robert Lofsky)、DVM、
ウィルモット動物病院 (Wilmot Veterinary Clinic)、
オンタリオ州キッチナー (Kitchener, Ontario)



ヨークシャーテリアのレキシィ (8ヶ月、
卵巣摘出済み、体重 3kg) が来院した。
飼主によれば、2日ほど前から嘔吐して
いたとのことであった。日曜日に、雑多
なものを食べたらしかった。ちょうど引
越しの最中で、家中に段ボール箱が散乱
していた。月曜日の嘔吐物には衣類のタ
グが混じっており、幅木や壁も齧ったよ
うだった。こんな誤食行動は初めてだと
飼主は言う。たまたま、一週間前からド
ッグフードも変えていた。レキシィは、
引き続き月曜から火曜にかけて数回に

わたって嘔吐し、ほとんどは胃液と泡だった。来院した水曜日も、朝からすでに2回嘔吐していた。飼主によると、レキシィは月曜から食餌を受け付けず、水は飲み、排尿はあったとのことであった。

身体検査では、粘膜の乾燥はなく、皮膚の色も正常であった。腹部触診では、特に異常は認められなかった。体温は、当院で最初に測定した時点で 37.5°C だったが、特に異常とは思わなかった。というのも、体温計がきちんと直腸内に挿入されなかったための測定誤差の可能性が考えられたからだ。この時点では、レキシィの家中の雑多なものを口にした誤食行動は、おそらくフードが変わったこと、あるいは引越しのストレスであろうと推測した。そして、制吐剤と胃腸疾患療法食を処方して診療を終わろうとしたのだが、飼主の「レキシィが震えているのはなぜですか？」という問いに、念のために再度検温してみたところ、なんと 36°C しかなかった。異常な低体温を確認したため、入院させて点滴し加温の必要性が高くなった。

採血後、レキシィの維持輸液速度の3倍の速度で点滴を行い、マロピタントとファモチジン[®]を皮下注射した。驚いたことに、血液検査の結果は明らかな異常が認められた。ナトリウムやクロールが低く、カリウム濃度は高く、BUN、カルシウム、リン濃度も上昇していた (図1および2)。Na/K比=20であった。

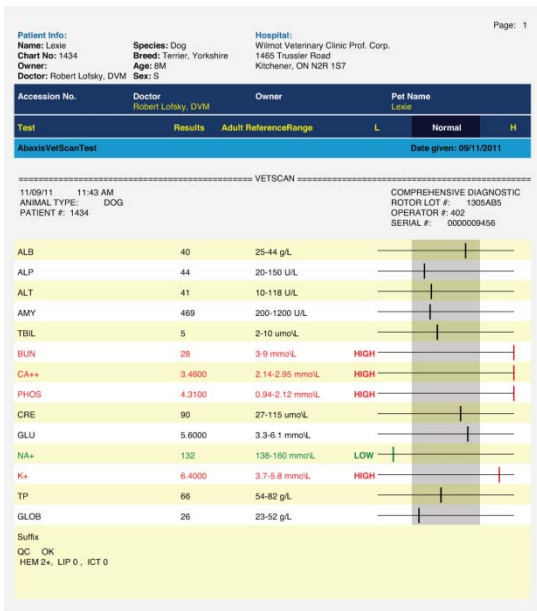


Figure 1: Comprehensive Diagnostic Profile



Figure 2: Critical Care Profile Plus Panel

CBC については、赤血球数が僅かに高く、ヘモグロビン濃度が高い（ヘマトクリット値は正常範囲の上限）以外は、ほぼ問題は認められなかった。これらの CBC データを、2ヶ月前の不妊手術時の術前血液検査データと比較したところ、ヘマトクリット値の顕著な上昇が明らかになった（図 3 および 4）。ありがたいことに、Abaxis 分析装置のおかげでこれら全部の情報が POC（ポイント・オブ・ケア）検査で得られ、副腎皮質機能低下症の治療が実施可能となった。輸液速度を、60ml/hr/kg、15 分間インターバルに引き上げ、デキサメ

タゾン を静注し、ACTH 刺激テストを実施し、医薬品業者にフルドロコルチゾン を注文した。1 時間ほど加温と点滴を続けると、レキシの体温は正常レベルまで上昇した。点滴速度を維持速度の 2 倍まで戻し、スクラルファートを経口投与し、食餌も与えたところ、フードを少し食べたてくれた。その日の夜、再度血液検査を実施した時点では、各種の値は基準範囲内に収まっていた（図 5）。

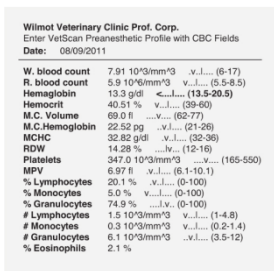


Figure 3: Pre-anesthetic Profile Test

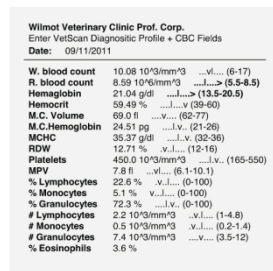


Figure 4: Diagnostic Profile Test

レキシの症例では、VetScan 生化学分析装置が明らかに大きく功を奏した。POC 検査によって瞬時に結果が得られ、ただちに治療を開始できた。VetScan がなかったとしたら、最初の血液検査結果が判明するのは翌日になり、アジソン病の治療に取り掛かるのは、さらに一日遅くなっていたであろう。誤食行動と誤診して胃腸薬を処方していたかもしれない。POC 検査のおかげで、翌日には診断を確定でき（図 6）、翌朝からフルドロコルチゾン治療を開始できた。その日の夜には、レキシは食欲を回復し、元気も出てきた。

わずか1日の入院で、血液検査データ(図7)は、ほぼ正常レベルに戻り、レキシは無事退院できた。

その後、レキシは順調に回復した。初来院から2週間後にもう一度、血液検査を実施したが、VetScanのおかげで、レキシの飼主に来院時にその場で血液検査の結果を伝えることができた。電解質の値はすべて正常に戻っていた。飼主の話でも、レキシはすっかり元通りになり、陽気にはしゃいでいるということだった。

Accession No.	Doctor	Owner	Pet Name
	Robert Lofsky, DVM		Lexie
Test	Results	Adult Reference Range	L Normal H
AbaxisVetScanTest Date given: 10/11/2011			
VETSCAN			
11/09/11 06:48 PM	ANIMAL TYPE: DOG		CRITICAL CARE PROFILE PLUS
PATIENT #: 1434			ROTOR LOT #: 1344A48
			OPERATOR #: 402
			SERIAL #: 0000009456
ALT	29	10-118 U/L	
GLU	9.4000	3.3-6.1 mmol/L	HIGH
BUN	12	3-9 mmol/L	HIGH
CRE	50	27-115 umol/L	
NA+	134	138-160 mmol/L	LOW
K+	4.9000	3.7-5.8 mmol/L	
CL-	97	106-120 mmol/L	LOW
TCO2	23	12-27 mmol/L	
Sulfix			
QC OK			
HEM 1+, LIP 1+, ICT 0			

Figure 5

Accession No.	Doctor	Owner	Pet Name
	Robert Lofsky, DVM		Lexie
Test	Results	Adult Reference Range	L Normal H
Acth Stimulation (2 Samples) Date given: 09/11/2011			
Cortisol (pre)	<10	15-120 nmol/L	
Cortisol (post)	<10	220-550 nmol/L	
Cortisol Comment			

Please Note That These Reference Ranges Are For Normal Animals That Are Not Receiving Any Type Of Medication. Interpretation Will Vary For Pets Receiving Therapy For Hyperadrenocorticism. For Assistance, Please Contact Customer Service To Speak To A Clinical Pathologist.			

Figure 6

Accession No.	Doctor	Owner	Pet Name
	Robert Lofsky, DVM		Lexie
Test	Results	Adult Reference Range	L Normal H
AbaxisVetScanTest Date given: 10/11/2011			
VETSCAN			
11/10/11 02:58 PM	ANIMAL TYPE: DOG		COMPREHENSIVE DIAGNOSTIC
PATIENT #: 1434			ROTOR LOT #: 1300A55
			OPERATOR #: 402
			SERIAL #: 0000009456
ALB	29	25-44 g/L	
ALP	69	20-150 U/L	
ALT	25	10-118 U/L	
AMY	232	200-1200 U/L	
TBIL	5	2-10 umol/L	
BUN	4	3-9 mmol/L	
CA++	2.2900	2.14-2.95 mmol/L	
PHOS	1.5600	0.94-2.12 mmol/L	
CRE	30	27-115 umol/L	
GLU	5.8000	3.3-6.1 mmol/L	
NA+	143	138-160 mmol/L	
K+	3.7000	3.7-5.8 mmol/L	
TP	49	54-82 g/L	LOW
GLOB	20	23-52 g/L	LOW
Sulfix			
QC OK			
HEM 0, LIP 0, ICT 0			

Figure 7

監訳 株式会社セントラル科学貿易

米国 ABAXIS 社 発行「Vetcom 2012.1 月/12 月号」より

※本内容は米国での症例であり、日本国内では異なる場合が御座います。

ケーススタディ

オリヴィア（13歳、F/S DSH ネコ）、2009年1月、多飲多尿、過食、体重減少の既往歴で来院

検査所見から頻脈、触診で右甲状腺の腫大（長さ約1cm）が認められた。検査所見と心エコーから、甲状腺機能亢進症および心筋症と思われる心臓肥大と診断された。メチマゾール治療を施し、症状は大幅に改善した。その後の経過観察で、甲状腺機能亢進症は適切に管理されており、心筋症も進行は認められなかった。2011年8月、定期検査に来院した時点で、右甲状腺は依然として1cmほどの大きさだった。このときは歯科治療が必要と判定され、麻酔前に、Abaxis VetScan VS2でPrep Profile IIおよびT4テストを、さらにAbaxis VetScan HM5でCBCテストを実施した。結果はすべて正常範囲内に収まっており、T4値=1.4であった。歯科処置も問題なく完了した。



わずか2ヵ月後の2011年10月10日（月）、オリヴィアは再び来院した。飼主によれば、首の右側に大きな塊があり、最近どうも元気がないという。右甲状腺部位に、5cmほどの卵型の塊がはっきりと視認できた。頸部触診とレントゲン検査で、この塊は気管を圧迫し、気管が背側・左側方に変移していることが確認された。触診時、不快感が大きいようだった。

短期間に急激に肥大が進んだ点が大きな懸念事項だった。わずか8週間前は甲状腺ホルモン濃度は正常であったことが、塊が急成長して気管を圧迫していることから、外科手術で摘出する必要性が考えられた。しかし甲状腺機能亢進症と心筋症の既往歴を考慮すると、手術は非常にリスクが高い。

しかしながら、具体的な処置を決める前に、再度、VS2によるT4テストを実施したところ、2ヶ月前は正常値の1.4であったが、この時点では10を超えていた。飼主への稟告で、オリヴィアはメチマゾール服用をますます嫌がるようになっていくことが判明した。飼主との相談の結果、放射性ヨード治療（ I^{131} ）を実施することに決定した。2011年10月17日に治療が行われ、現在では非常に快復している。

Abaxis 検査機器は、オリヴィアの症例で非常に重要な役割を果たした。来院した10月の月曜日の時点で、オリヴィアは非常に弱っていた。Abaxis 検査機器による院内テストで、1時間後には結果が判明し、治療方針を立てることができた。オリヴィアの飼主は、すぐに放射線治療が可能な病院に連絡をとり、治療を予約した。翌週月曜日、つまり当院来院か

ら1週間後には、I¹³¹治療が実施され、今ではオリヴィアは自宅で元通り元気に過ごしている。オリヴィアのケースでは、即時診断が可能であったことで不必要にリスクの高い外科手術を回避できた。Abaxis 検査機器が院内にあって本当によかった。迅速に対応できたのも、VetScan のおかげである。

監訳 株式会社セントラル科学貿易

米国 ABAXIS 社 発行「Vetcom 2012.1 月/12 月号」より

※本内容は米国での症例であり、日本国内では異なる場合が御座います。